

植民地主義・ナシヨナリズム・キリスト教…

一九世紀末～二〇世紀前半の南アフリカにおけるアフリカ人を中心に

大澤 広 晃

本報告では、一九世紀末～二〇世紀前半の南アフリカにおけるアフリカ人ナシヨナリズムとキリスト教の関係を検討した。当時の南アフリカは植民地支配下であり、アフリカ人は支配される側であった。よって、ここで検討するナシヨナリズムは、基本的に、植民地統治下で剥奪ないし制限された権利の獲得や自立、自らの歴史や存在の復権、独自のアイデンティティの形成を目指す動きとして把握される。そうしたナシヨナリズムにキリスト教がどのように関わったのかを検討し、そのうえで、今後の課題を提示することが、報告の目的であった。

報告ではまず、南アフリカ内部の運動として、(一) 独立教会、(二) リバイバル(信仰復興)、(三) アフリカ民

族会議(ANC)を取り上げ、それぞれの事例にみられるナシヨナリズムとキリスト教の相関を検討した。

(一) 独立教会…一九世紀末の南アフリカでは、一部のアフリカ人キリスト教徒が白人宣教師の管理下にある既存の教会を離脱し、独立教会を創設する動きが出てくる。その最も著名な例は、ウエスリアン・メソヂスト教会のアフリカ人牧師マンゲナ・モコネが興したエチオピア教会である。モコネは、教会内における人種差別とそれを許容する白人宣教師の姿勢を非難し、アフリカ人のための教会としてエチオピア教会を設立した。エチオピア教会自体が政治的主張を行ったわけではないが、教会組織内の白人支配を拒絶し、アフリカ人としての団結と、キリスト教を基盤と

した集団意識の醸成をはかろうとした点で、この運動をアフリカ人ナシヨナリズムの嚆矢とみなすことができよう。

(二) リバイバル・リバイバルもアフリカ人アイデンティティの形成で重要な役割を果たしたと考えられる。この点に関しては、アメリカ・ズールー宣教団の事例が興味深い。一九世紀末、同宣教団に所属するアフリカ人信徒たち（コルワと呼ばれた）は、アメリカ人説教師が説くホーリネス神学の影響を受けて、リバイバルを経験した。信仰への確証を深めたコルワは、教会運営の権限を自分たちに譲り渡すよう白人宣教師に要求し、宣教師もこれを受け容れざるを得なくなった結果、コルワが主導するアフリカ人会衆派教会が誕生した。エチオピア教会とは異なり、同教会が大きな社会運動に発展したわけではない。しかし、リバイバルを通じて、コルワは、教会における自治、同じ経験を共有する者同士の団結心、自分たちの信仰（アフリカ人のキリスト教）を獲得した。その後、コルワは、「アフリカ人のキリスト教」を広めるべく、自ら宣教活動に従事し、新たに信者を獲得していった。以上の事例は、リバイバルが、キリスト教に基づく独自のアフリカ人アイデンティティ形成の契機となった可能性を示唆している。

(三) ANC：二〇世紀初頭に創設されたANCは南アフリカを代表するナシヨナリストの団体だが、さまざまな面

でキリスト教と関わりあっていた。まず、初期の指導者層の多くは、ミッシェンスクールで西洋教育を受けたキリスト教徒であった。ANC議長経験者には、ジョン・ドウベやZ・R・マハバネなど聖職者も多い。草創期のANCでは、キリスト教と西洋文明を参照基準に、近代化し西洋化したアフリカ人ネイションの創出を目指す動きもみられた。なかには、南アフリカに住む多様なアフリカ人をネイションにまとめ上げるための土台として、キリスト教を用いるべきだと説く者もいた。その一方で、少数白人政権が人種隔離政策を推進すると、ANCはしばしばキリスト教が唱える「神のもとでの平等」や「人類共通の同胞意識」を掲げ、宗教倫理の観点からそうした動きを批判した。このように、キリスト教は、ネイションに団結をもたらすための基盤として、また、植民地主義を批判するための論理として、ANC内部で頻繁に援用されていたのである。

その一方で、キリスト教が「伝統」と協働することでナシヨナリズムを下支えするという事例もみられた。ナタールにおけるズールー王家復権運動がそれである。二〇世紀初頭のナタールでは、植民地化の過程で多くのアフリカ人（ズールー）が土地を失い、社会不安が高まっていた。そうしたなかで、かつて同地に存在したズールー王国（一八七〇年代のズールー戦争でイギリスに征服される）

が想起され、旧王家の当主を再びズールーの指導者として復権させようとする動きがみられた。社会不安の治療薬として、「伝統の復活」が持ち出されたのである。ナタールを拠点とするANC活動家（多くがキリスト教徒）も、この運動に関与した。ここでは、伝統的支配者層とキリスト教徒を含む有力者からなる評議会の結成（ズールー・ナシヨナル基金の設立、ズールー・ネイションの教会としてのシヤカ・ズールー教会（シヤカはズールー王国を強大化させた王）の創設などが議論され、ズールー意識の強化が図られた。他方で、ローカルなアフリカ人アイデンティティを強調するナシヨナリズムは、全国規模でのアフリカ人の団結を企てるナシヨナリズムとは相容れない側面もある。実際、ナタールのANC運動は、ズールー王家復権運動を支持する勢力とそれ以外の人々の間で、次第に分裂を深めていった。

ところで、南アフリカにおけるキリスト教についての最近の研究は、そのトランスナショナルな側面に注目するようになってきている。そこで、本報告の後半部分では、キリスト教を媒介にした南アフリカと外部世界との結びつきが、ナシヨナリズムにどのような影響を与えたのかを検討した。ここでは、(一) 教会の国際的ネットワークとナシヨナリストたち、(二) エキュメニズムの影響を取り上げた。

(一) 教会の国際的ネットワークとナシヨナリストたち…キリスト教会はそもそもトランスナショナルな組織である。アフリカ人ナシヨナリストのなかには、教会のネットワークを通じて海外で学ぶ機会を得た者もいた。その多くはアメリカ合衆国に渡り、宗教のみならずさまざまな分野で学びを深めた。その結果、二〇世紀の南アフリカには、アメリカからさまざまな思想が伝わった。留学したアフリカ人がとくに感銘を受けたのはアフリカ系アメリカ人の運動であり、ブツカー・T・ワシントン、マークス・ガーヴェイ、W・E・B・デュボイスらの思想は、南アフリカにおけるアフリカ人ナシヨナリズムの展開に大きな影響を及ぼした。

(二) エキュメニズム…二〇世紀になると、異なる教派間の協力を目指すエキュメニズムが盛り上がりを見せる。キリスト教徒であるアフリカ人ナシヨナリストのなかには、エキュメニズムの会合に招かれ、世界のキリスト教徒と交流し議論する機会を得た者もいた。エキュメニズムは、アフリカ人ナシヨナリストをキリスト教徒のグローバルなネットワークに結びつけ、さらには、隔離政策が進展する当時の南アフリカでは得がたい、アフリカ人と白人が共に議論する機会を提供したのである。また、J・H・オルダムやジョン・モットといった当時のエキュメニズムの指導

者たちが、概して南アフリカの隔離政策に批判的だったことも重要である。そうした主張を持つ人々との交流を深めることで、アフリカ人は自分たちの運動（ナシヨナリズム）が世界のキリスト教徒共同体から支援されているという実感を持つことができたのである。

以上、本報告では、南アフリカにおけるアフリカ人ナシヨナリズムとキリスト教の関係を、ローカルな視点とトランスナショナルな視点から概観した。最後に、今後の課題を提示しておきたい。まず、ナシヨナリズムの指導者だけでなく大衆にも注目し、草の根レベルでのナシヨナリズムとキリスト教の関係により目を凝らしていく必要があるだろう。ここでは、上述したリバイバルやホーリネス神学、またそれと関係するペンテコステ派の動向が主要な研究テーマとなるはずである。また、外部世界との関係についても、さらに考察を深めていく必要がある。アフリカ人ナシヨナリズムが圧倒的な力を持つ少数白人支配体制と対峙するためには、外部との連携はきわめて重要であり、その際にはキリスト教ネットワークが重要な役割を担ったはずである。そうしたネットワークを通じた人的・思想的交流がナシヨナリズムにどう影響を与えたのかについて、具体的な論証を積み重ねていくことも、今後の重要な課題と言えよう。

（南山大学外国語学部准教授）